

遠山景晋『未曾有記』について：蝦夷紀行がもたらしたものの

板坂， 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11994>

出版情報：語文研究. 60, pp.18-28, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



遠山景普『未曾有記』について

——蝦夷地紀行がもたらしたもの——

板 坂 耀 子

遠山景普とその紀行文『未曾有記』に関しては鈴木棠三氏が「近世紀行文芸ノート」（東京堂出版）所収「遠山景普の旅行歴」で詳細に紹介された。鈴木潤三氏「巷説遠山金四郎」を引用しつつ述べられるその略歴によると景普はいわゆる名奉行として知られる遠山景元（幼名は同じ金四郎）の父にあたり、宝暦二年生、明和四年遠山家養子となり、寛政十一年二月、幕命をうけて蝦夷地に赴く。更に文化元年には長崎へ、文化二年と文化四年には再び蝦夷地へ、文化五年と六年には対馬へといずれも外交関係の仕事で赴く。その後文政二年には勘定奉行に就任し、同十二年に隠居して楽土と改名、天保八年七月に八十六才で没する。

『未曾有記』『続未曾有記』『未嘗有後記』『津志満日記』等、景普の一連の紀行文は、いずれもこれらの公務旅行の際に記されたもので、現存する写本の多くは景普の下吏であった吉見義方（吉見）が同僚三名とともに原本を一夜借覽して書写したものの転写であり誤脱が多いとされる。

景普伝と、各紀行の内容に関しては、鈴木棠三氏の紹介に追補すべきことはない。本稿で触れたいと思うのは、鈴木氏の論文及び『国

書総目録』が述べる同紀行の書誌に関しての若干の補正と、近世紀行文学史上から見た同紀行の位置の考察である。

1・書誌補足

現存する諸本は、鈴木氏も述べられる如く、いずれも自筆本ではない。書誌の大略を左に記す。「」内は各文庫・図書館の目録番号である。

①内閣文庫「二七七―一三三七」。十冊本。二六・〇×一八・二糎。「鈴木重寿南山楼珍藏之記」朱印。白と茶の横縞表紙。10行書。第一―二冊外題「未曾記 上（下）」。第三―五冊が「続未曾有記 上（中）（下）」。第六―八冊が「未曾有後記 上（中）（下）」。第九―十冊が「続未曾有後記 上（下）」。第五冊末尾に吉見義方後書あり。各冊35―60丁。内題は「未曾有記 上」など。

②内閣文庫「二七七―一三三八」。十冊本。二六・三×一八・一糎。「川路氏蔵」印。白と茶の横縞表紙。10行書。第一―二冊外題「未曾有記上 一（下 二）」。第三―五冊「未曾有後記上 三（中

四) (下 五)。第六、八冊「統未曾有記上 六(中 七)(下 八)」。第九、十冊「統未曾有後記上 九(下 十)」。第八冊末尾に義方後書。各冊30〜53丁。内題は「未曾有記 上」など。

③東大史料編纂所「二〇四五―四九」。二冊。二七・〇×一九・四。茶色表紙。10行書。45丁・56丁。外題「未曾有記」。中表紙題「未曾有記 乾」。内題は「未曾有記上」など。奥書「右未曾有記 二冊 越後国三島郡與板町新野文資所藏 明治三十年七月採訪同三十四年三月謄寫了」。

④神宮文庫「八一九七二」。二冊。二三・六×二六・五。白に緑の墨流模様表紙。68丁・78丁。外題「未曾有記上」。内題なし。「内藤耻叟」朱印。(第二冊外題は「未曾有後記下」。内容も。)

⑤神宮文庫「八一九七二」。二冊。二七・二×二三・七。白と茶の横縞表紙。11行書。50丁・62丁。外題内題ともに「未曾有記 上」。

⑥北海道庁「二五九一―五九二」。二冊。二二・四×一五・八。青表紙、左肩白題箋。朱入。11行書。55丁・48丁。外題「未曾有之記上」。内題なし。

⑦北海道庁「二五九五―五九六」。二冊を一冊に合本。二六・四×一八・四。白と茶の横縞表紙。「開拓使函館支廳」の13行赤野紙使用。各冊47丁。外題「未曾有之記 乾(坤)」。中表紙題「未曾有之記上」。内題なし。

⑧国会「一四五―一五三」。二冊を一冊に合本。二三・八×一六・七。青色表紙。8行書。67丁・55丁。外題「未曾有の記 上」。内題なし。

⑨東京博物館「和六九八」。二冊。二六・四×一八・五。白色表

紙。10行書。40丁・35丁。外題「未曾有記 乾」。内題なし。

⑩東大「丁四〇―四四七」。四冊を合一冊。二七・三×一八・一。紫色表紙。10行書。23丁・22丁・22丁・17丁。外題「未曾有記 全」。中表紙題「未曾有記 一」。「陽春廬記」「南癸文庫」朱印。内題なし。

⑪北海道大学「旧記六五三―一〇二」。二冊(取合せ本)。第一冊茶色表紙。二七・〇×一九・五。13行書。37丁。外題「未曾有記 一名奥之日誌 上」。中表紙題「未曾有記 上 一名奥之日誌」。

内題「未曾有記」。奥書「北海道廳本開拓使十三行野紙三十七枚ヨリ模写ス」。第二冊白色表紙。二八・八×二〇・四。10行書。41丁。外題「未曾有記 下」。内題「ミそウの記 遠山金四郎編」。「松前」

「養聞齋藏書部」朱印。奥書「未曾有記了文化十二年十二月誌」。

⑫岩瀬文庫「二五二一七」。四冊。二六・〇×一八・八。茶色表紙。10行書。78丁・85丁・54丁・34丁。朱あり。外題内題なし。内容は第一冊「未曾有之記」、第二冊「未曾有後記」、第三冊「統未曾有後記」、第四冊「日光參詣記」。

⑬函館市立図書館「〇〇三〇―三〇〇一―五〇〇二」。二冊を合一冊。二七・二×一八・七。銀砂入白表紙。10行書。44丁・37丁。

「田中千秋」朱印。外題「未曾有の記 上」。内題なし。末尾に朱書「未曾有記 二冊 遠山金四郎著」。

⑭蓬左文庫「三三二―三三二四〇」。一冊。一三・五×一六・七。青色表紙。11行書。74丁。「水野正信圖書之記」朱印。朱あり。外題「青書叢書十八 櫻未曾有之記全 遠山楽土翁著」。内題なし。省略が多い。

⑮無窮会「神習七〇九五」。三冊。二六・〇×一八・五。白と茶

の横縞表紙。10行書。31丁・33丁・29丁。「井上頼因蔵」文鳳堂印朱印。外題「未曾有記上」。内題「未曾有記卷之上」。

⑩北海道庁（一五九七）。二冊を合冊。二六・七×一九・〇。襷。黄色表紙、左肩白題箋。「開拓使」柱の13行青色野紙使用。38丁・30丁。「雑記」風俗」等付紙あり。外題「未曾有記 完」。中表紙題「未曾有記 上 一名奥之日誌」（第一冊）。「未曾有記 下（第二冊）。内題「未曾有記 親類相繼」。

⑪内閣文庫（二七八一八九）。一冊。二四・〇×二七・〇。襷。「浅草文庫」「荒井蔵」朱印。青色表紙。10行書。84丁。外題「おくの日記 全」。文化九年山本三保助清房、文化十三年保田書。内題なし。

（以上は「未曾有之記」もしくはそれを含むものである。）

⑫神宮文庫（八八八〇三）。三冊。二七・二×一八・六。襷。白と茶の横縞表紙。10行書。43丁・42丁・56丁。外題内題に「統未曾有記上」。末尾に吉見義方後書。

⑬函館市立図書館（〇〇三〇三〇一五〇〇二）。三冊を合一冊。二六・六×一八・二。襷。白に茶の横縞表紙。10行書。37丁・39丁・53丁。第一冊外題「統未曾有後記上 申」、内題「統未曾有後記上」（内容も）。第二冊外題「統未曾有記中 午」、内題「統未曾有記中」（第二・三冊の内容は「統未曾有記」）。末尾に義方後書。

⑭神宮文庫（八九七三）。三冊。二七・三×一八・六。襷。白と茶の横縞表紙。10行書。43丁・38丁・36丁。外題「未曾有後記 上」。内題「北未曾有後記上」。奥書なし。

⑮神宮文庫（八八九四）。二冊。二七・二×一八・六。襷。白と茶

の横縞表紙。10行書。43丁・37丁。外題内題ともに「統未曾有後記上」。

⑯内閣文庫（一七七一一一四）。二冊。二六・〇×一八・二。襷。白と茶の横縞表紙。10行書。34丁・43丁。外題「未曾有記附津志満日記 上（下）」。中表紙題「未曾有記附津志満日記 十一（十二止）」。

内題「津志満日記上（下）」朱あり。奥書「明治十年十二月 高松修徳 木山正中 校」。

⑰東大（丁四〇四四）。二五・八×一八・五。襷。緑色表紙。10行書。64丁。外題「未曾有記 遠山氏対馬島道之記并奥州松島記行抜粹 全」。内題なし。「渡部文庫」朱印。

鈴木氏は『国書総目録』によると、未曾有記の正編は内閣文庫を始め、各地の文庫に所蔵されているものが多いが、統未曾有記・未曾有後記・統未曾有後記・津志満日記になると、内閣以外では神宮文庫に蔵するだけのようである（「遠山景普の旅行歴」と述べられるが、右記のように、必ずしもそうではなく「未曾有之記」の中に「統未曾有記」以下が収録されるものや、『国書総目録』には登録されていないものがある。まとめ直すと、次のようになるうか。波線部が『国書総目録』未載の分である。

未曾有記（内閣一七七一三三七、内閣一七七一三三八、内閣一七八一八九）（外題「おくの日記」、国会二四五二五三、東博和六九八、東大丁四〇四四七、東大史料二〇四五四九、北大旧記六五三十一）二、岩瀬一五二一七、函館〇〇三〇三〇一五〇〇一、蓬左三二一〇三二四〇、神宮八九七二、神宮八一九七二、無

窮神習七〇九五、北海道庁一五九一、北海道庁一五九七、北海道庁一五九五、六

続未曾有記〔内閣一七七一―一三七、内閣一七七一―一三八、神宮八八〇三、岩瀬一五五二―一七一（『未曾有記』と合冊）、函館〇〇三三〇三〇〇一五〇〇二（部分）〕

未曾有後記〔内閣一七七一―一三七、内閣一七七一―一三八、神宮八八九七（『未曾有記』と合冊）、神宮八八九七三、岩瀬一五二一―一七一〕

続未曾有後記〔内閣一七七一―一三七、内閣一七七一―一三八、神宮八八九四、岩瀬一五二一―一七一、函館〇〇三三〇三〇〇一五〇〇二（部分）〕

津志満日記〔内閣一七七一―一四、東大丁四〇四四〕
日光参詣記（仮題）〔岩瀬一五二一―一七一〕

現存の写本の中では、やはり寛政十一年の東蝦夷踏査行を題材とした『未曾有記』が圧倒的に多い。制作順ではそれに続くのは文化二年（正月～五月）長崎へロシア使節レザノフとの会見に赴く『続未曾有記』であるが、その直後（文化二年閏八月～同三年八月）に記される『未曾有後記』が、西蝦夷踏査行の記であるため、『未曾有記』と対をなすものとしてとらえやすかったためか、しばしば順序が逆になったり、前者を省略して合冊される。

鈴木氏は、吉見義方らが一夜の内に写したものであるためか誤字脱字の多い写本であることを指摘され、「未曾有記が、内容的には高く評価すべき記録であるにもかかわらず、従来ごく一部の人の間でしか利用されなかった理由も、全巻揃った本が内閣文庫以外

には手近かに無く、しかもその写本があまり読みよい本でなかったことが、大いに関係しているように思われる」と述べられる。また神宮文庫八八九七一本の上冊表紙にも「此記二冊ハ遠山景普君の北地の旅日記なり其写し手のよからざるにや誤字脱字読わけかたしいかて善本を得て校訂すべくなむ 寛政十一己未」と書入れがある。

諸本を比較すると、意味不明な箇所はほとんどないが、やはり脱落部分は多い。「未曾有記」の場合、それは①～⑦本のA系統と⑧～⑩本のB系統にわけられる。（カード不備のため⑩本については不明）。

A Bいずれの系統が善本かについては一概に言えない。B系統が脱落している例としては、

（五月廿七日）浦川舟（にて渡り仮小屋昼休此川より見れば近山も重り遠山も青う）て面白し

（八月十八日）右の如くに〔湧所拾余ヶ所有由只地を掘ても處によりて〕湧と云

など十例が見える。いずれも（ ）の部分でB系統の写本にはない。逆にA系統の脱落する例としては、

（三月廿二日）人足継場（おとめ村にて夜明る間々田野木方一里十七丁）是より下野也

（五月廿八日）手と手を取組（腰をかゝめぬき足をして歩み来り庭の上に安坐せし各自に）椀と箸一ツ持居にメノコ柄杓にて酒を汲

ミ抄 など十三例がある。更にどちらが善本とも決めがたい異同の例として、

（四月廿九日）数の小舟の其働目さましくも亦すさましく（A・

我もくゝと舟もて引程に B・我々舟も小舟にて引程に」目たゝくうちに五六艘の大船を左右なく汀に寄てけり

(五月廿三日) 鷲の子 (A・飼てあり B・ナシ) 狐の子飼てあり

など十八例がある。

底本として使用するには、両系統を備いあうしかないであろう。なお『続未曾有記』以下については異本が少なくなるが、やはり、かなり大きな異同が存する。たとえば『未曾有後記』では同じA系統の①②④⑤本の内、④本は三月廿六日に約半丁分の脱落が、他の三本は四月廿日、廿五日、五月廿日、廿九日に大きな脱落がある。

2・位置づけ

近世紀行文学史を検討していく上で、蝦夷紀行類に触れずに通ることとはできない。幕末の松浦武四郎の著作類を除いても、国書総目録が記する蝦夷関係の紀行類は、書名から推察できるものだけで60点近くになる。「北遊」「東遊」などの文字を冠した紀行文等の中にも蝦夷紀行の内容とするものは多いから、実際の数は更に増加するだろう。しかし、単に数量の問題ではなく、近世紀行の性格のいくつかの面が成立していく上で、蝦夷紀行の存在は重要である。

周知の如く、中世に蝦夷地を支配していた蠣崎家が慶長四年、徳川家康に臣従して姓を松前と改めて以来、蝦夷地は松前藩によって支配される。しかし被支配者層であったアイヌの人々の反乱、また北方からのロシアの進出などもあって、緊張の絶えない地でもあった。幕府の巡見使が初めて来藩したのは寛永十年であり、以後、寛文七年、天和元年、宝永七年、享保二年、と幕府は巡見使を派遣す

る。

蝦夷地に関するまとまった文献の最も初期のものは、享保五年成、新井白石『蝦夷志』であり、更に天明元年松前広長『松前志』によって、「古典的な意味においての『蝦夷』の『大観』が完成した」(黒田秀俊『蝦夷の認識を確立した先蹤書』)という。この二書の間、元文四年板倉源次郎『蝦夷隨筆』(蝦夷行記、北海隨筆とも)が成り、宝曆十二年宮川直之『奥羽蹤松前日記』、安永三年平沢元愷『瓊浦偶筆』が成る。

黒田秀俊氏は『蝦夷志』『松前志』を、文献批判による古典的蝦夷研究法の最後のものと位置づけられる。これ以後、ロシアの南下政策にもなつて、幕府は北方政策を講じはじめ、天明年間、大規模な蝦夷地踏査を何度も行う。民間にも蝦夷地への興味が高まり、天明三年には工藤平助『赤蝦夷風説考』が、同四年には平伏東作『東遊記』が、同五年には林子平『三国通覽図説』が、同八年には子平を批判する古河古松軒『東遊雜記』が書かれた。

寛政四年にはロシア使節のラクスマンが根室に来航、対日通商を求め、幕府は翌年これを拒絶するが、このようなロシアの動きに対して『蝦夷地開国』(寛政十一年『松平伊豆守殿御口達書』。海保嶺夫氏「近世の北海道」による)と銘うって、蝦夷地の経営にのり出し、寛政十年と十一年に大調査隊を派遣する。その中に、達山景晋もいたのであるが、他にも、羽太正養、最上徳内、近藤重蔵、渋江長伯、谷元旦といった人々が参加していた。

これらの人々の著作をはじめとして、蝦夷関係の文献あるいは紀行文はこれ以後急激に増加してゆく。和田敏明氏は「鎖国の夢を破った古典三名著」中で、次のように述べられる。

「このような北方情勢のなかで『赤蝦夷風説考』について、林子平の『三国通覧図説』『海国兵談』、佐藤玄六郎の『蝦夷拾遺』、最上徳内の『蝦夷草紙』、本多利明の『赤夷動静』、羽太正養の『休明光記』、大原左金吾の『地北寓談』『北地危言』、桂川甫周の『北槎聞略』、大槻玄澤の『環海異聞』、間宮林蔵の『北蝦夷図説』『東韃紀行』、高橋景保の『北夷考証』など北方問題の古典的存在といわれる名著がほぼ四半世紀の間に次々と発行された。これらは当時の世論の啓発に役立つとともに、幕閣の北方経営の立案にも大きく貢献した。わたしたちの興味をひくのは、これらの著者が友人、親類、師弟の關係で深く結びついていたことで、お互いに教えられ、はげまされ、刺激されて、あたかも諸家が一体となって「北方文献ブーム」が出現したかの觀を呈したことである。」

和田氏が述べておられるのは、蝦夷關係の文献についてのことであるが、同様のことは紀行文にも言えるかと思う。近世の紀行文は質量ともに天明期以後に一つのピークを迎えて、豊富な内容と平明な文体を持つ、すぐれた作品を多く生む。大部のものも増加する。それらの作者たちの多数が蝦夷に関りを持ち、あるいはそれを介してつながる。古河古松軒、松浦武四郎の著作は近世後期の紀行文学史上、代表作の一つであるし、平沢元愷は、幕吏であって大部の紀行『樂遊余録』を著した吉田桃樹の同書に序文を寄せ、自らも紀行文の作品が多い。最上徳内、近藤重蔵らは、景晋の紀行文中にもよく登場する。谷元旦『蝦夷紀行』には「洪江氏」がしばしば出るがこれは蝦夷關係以外にも多数の紀行を記した洪江長伯であり、長伯はまた近藤重蔵とも親しく、東大史料編纂所に絹布に書された「送静斎近藤先生赴任浪速序」が存する。北海道庁には大田南畝が平秩

東作の『東遊記』を略記したというものの写し（東遊畧記抄）が存する。南畝もまた巧みに俗をとり入れたすぐれた紀行文を多く記した人であった。

古松軒、桃樹、景晋、長伯、南畝、等と数えあげてゆくと、近世後半の紀行作家たちの大きな一角が、蝦夷との関わりの中で浮かび上がってくる。彼らの多くが幕臣あるいは幕府や藩とのつながりを持つ人々で、長伯の紀行文の書名が『官遊紀勝』であることにもうかがわれるように、公務の旅を題材とし、公吏としての目で見聞した記録であることにも注目したい。鈴木氏は『未曾有記』に関し、

「以上、東西に各三回ずつ行なった大旅行は、いずれも公務出張旅行である。こういうのを旅行家と呼んでよいか、問題があるところである。これが旅行家なら、公務員の大多数は旅行家といえるのか、という反問もあろう。しかし現代とは違って、この時代の役人がこんなにも東奔西走的に旅行をしたのは稀有の例である。（中略）その意味で、遠山景晋は旧幕時代における旅行家の一人に数えられて然るべきだと考える。」

と景晋の旅行家としての資格を肯定される。その通りであろうし、むしろ元禄期の貝原益軒も既にそうであるように、近世の幕臣や藩士は公務の旅を有効に利用して遊歴をする例が多い。そのように恵まれた条件下で豊富な情報収集をしなければ、充実した内容になりえないのが近世紀行の性格の一面でもある。繊細な感性や強烈な個性が、外部に向かって警戒的で、自己の内面の観照と表出を主要な目的としている限り、少なくとも、近世後期に多くの読者が紀行文に対して求めた要素を備えることはできない。感性や個性は、少しでも多くのものを見聞し、広い視野からそれらを取捨選択し

て、自己の判断を下すというかたちで充分に利用され、發揮されなければならぬのである。

当時の幕府の蝦夷地政策が、今日から見ると、様々の問題を持つものであったとしても、景普をはじめとして、そこに参加した人々が、鎖国政策という幕藩体制の根本をゆるがす、政治外交問題に直接かかわる位置にあり、職務の上下には関わりなく政治や社会に、それぞれの責任と自信を持って触れてゆく立場にあったこと、彼らが自分のそうした立場や任務に疑いを抱かず、支配者としての姿勢や視線で行動し、見聞したことが、彼らの記した紀行文に、逃避や孤独とはおよそ無縁の、力強さや明確さを生んでいるのを、見逃すわけにはいかない。そういう立場で、自分たちのものとは異なる文化にふれていくとき、彼らの中には、ごく自然に、自己を確認し、認識し、他を観察し、評価あるいは批判する姿勢が生まれてくる。それは自ら蝦夷地以外の紀行文を記す際にもつながって、近世後期紀行文に欠かすことのできない一性格を築いている。

時代と、その中における自己とを自然に肯定する姿勢とともに、蝦夷紀行が近世紀行に与えたもう一つの要素は、近世紀行がともすれば無視しがちだった、旅の実態、日常生活の描写であろう。「東海道中膝栗毛」の好評が逆に示すように、近世の紀行文は、古典の考証、旅先の土地に関する報道、に比して、旅人自身の日常の体験を記録することが少なかった。だが、蝦夷地紀行は例外である。自らの日常を記すことがそのまま蝦夷地の風俗の紹介ともなるため、報道の姿勢が旅人個人の体験描写と結合して、きめの細かい現実感を生む。

「仮屋ハ菰にて葺四方葎内ハ蝦夷の作る蒲葎土上に荒葎布たるの

みわが座するはかりハ土の上に丸木を並へて葎に薄縁して二間半に三間余中に炬を穿つわか居る所ハ一間二間半其内甲冑佩刀鑓笠衣服の篋悉書籍簿帳の箱指替の紋付夜具の包机煙草盆火鉢をも置いて其内に住ハ臥してハ偃足にかたく起てハ座を安くせず一方の三尺口なれハ日影も明ならず二間半に二間余の炬ある處に從者八人しハし住へくもあらねハ屋ハ屋外にて薪わり海にて釣なすとれと夜ハさすか内に入りて打重つて臥す食物も是にて押はかるへし凡仮屋狹狭造り小異同あれ共大此躰にて当所ハ殊に見苦しく今宵五六月十一日迄十四日の逗留困苦いふはかりなし」(未曾有記巻下)

「三月晴場所夷人惣漁す村上と官船に乗て点検す十二三町ハ黒岩続て波平也岩を放れてハ浪高うして酔もの四五人有岸より三十町もあらんに碇おろせとも舟の揺動やます爰にて皆綸を垂る予ハ常に釣する事なげれと誠に釣せしに半時にも足らぬ程尺斗のかさ御七尾大なる王餘魚一尾得たり餌は鱒を切てつけおもりハ礫をくゝり付ル浮子ハなし常の紙鳶の糸の太キに五六尋もおろして船に引懸て置手こたへすれハ引上る也都下にて釣るやうに巧拙も工夫もいらす去る故に夷人等か一瞬に五も十も得百二百ハ片時も釣る也潮時にて利不利ありやがて潮満るを待ハ多く釣れんといひしか舟中に安んせぬ者もあり漁業のさまざま罾に見たれハいさとして半時余りにして帰りぬ都下にて釣好人に見せし(略)帰郷して語りたりともよも誠と聴く人もあらしとおもふ」(未曾有記巻下)

このような描写は、近世紀行文ではあまり見ることのできない精密さといつていい。

しかしながら、『未曾有記』の場合、蝦夷地の風俗の紹介、報道と

いった意識は、

「松前町家住宅風俗東遊記に尽せり」(未曾有記上)

「此辺より東蝦夷地なり夷人を初て見る此未人物器材風俗等蝦夷志北海隨筆蝦夷談聞記東遊記蝦夷拾遺三國通覽等二いへるにたかハねハしるさす」(未曾有記下)

との記述にもあるように必ずしも第一義のものではない。景晋が無意識にでもとっている創作姿勢は、別の要素を含んでいる。それは、やはり近世の紀行文にはしばしばあらわれる、作者自身を勇氣ある旅人、冒険者として演出させてゆく態度である。[#]作品全体を通じて、蝦夷地の風俗紹介等の精密さもさることながら、それらがすべて、景晋という、強い印象を与える人物を介して描かれている観がある。近世の、古典はなれをした紀行にしばしば見られる、主人公の存在の薄さが、まったく感じられない。作品中最も印象の強い津軽海峡越えの場面は、鈴木氏も紹介されるが、その後のチコルキンの難所を踏破する場面[#]にしても景晋は、自らを一種の行動する冒険者として充分に活躍させることによって、作品を魅力あるものにしようとしている。

余談であるが、津軽海峡越え、チコルキン踏破の二場面ともに、景晋は、その直後に、故郷の人々あるいは上官に報告しようとして、とっさに書きとめた旨を記している。

「渡海の後」此一条爰に記すること江都に聞えて三馬屋の湊にて船くつかへし誰々ハ底のミくつとなりたりむさんやなと語つたへんハ必定也羽書を以て渡海無異の事言上する次てに己か家くにも文やりつれと尚其実をしるして妻子の心をやすめ観戚故友にも傳へんとて忽くに細書し到書郵の者を待てふるさとへそ遣しける」

(未曾有記卷上)

「(チコルキン越えの後)使君に見參せんとき此事語り申はやと矢立取出て忽くに略記するのミ」(未曾有記卷下)

紀行文中の、長いまとまった描写の生ずる過程の一例がうかがわれる。なお、後者の文中で使用した矢立について景晋は後に、

「角に長き矢立をつくりて三四年持しを此行にも片時もはなさず懐にもし腰にもせり雪浦の垂松の下にて物書んとするに墨かわきたり野中の清水もなけれハ路のほとりの萩の朝露を墨にひたして物書しかこたひの調度の中にて此矢立こそふるき物なるを愛してはきのつゆと銘す」(未曾有記卷下)

とも記す。こういった細かい現実への愛情が、あるいは、生活感覚を失わない、主人公不在にならない紀行文制作の姿勢と結合するのであろうか。いづれにせよ『未曾有記』の魅力は、蝦夷紀行一般に通ずる、現実肯定の力強い態度から生ずる豊富な情報の紹介と精密な旅の実態の描写とともに、主人公像の確立と、それにともなう視点の確かさであろう。それはまた両者ともに、近世紀行文が持った貴重な特質なのである。[#]

3・附記

おわりに、文体について若干つけ加えよう。

景晋は『未曾有記』六月十三日の条で、夢中に友人と交した会話として、この作品の文体に言及している。

「十三日晴處ハ即蝦夷地也車の下簾あけて緋の束帯したる人の来るを在中将業平也として皆人見るニ向の方ち引立鳥帽子に白鉢巻し花田の大紋に袴のすそ長う白砂を蹴はらし萌黄の糸巻の太刀に白鮫

打□横たへて河内判官楠正成と高声に名乗て出来る業平と正成何等の交りそこへ都下の戯場に入しかと思ふうちに業平と見しハ□中務大輔也足下ハはや蝦夷地の官事畢り玉ふか我ハ式日の賀を申て椋田門方まかるなるか寒温を問はんかために来りたりといふかと思へハ正成と見へんハわか身にて有ける(中略)車の内外にて物言かたらんとて例の文筆の事共いひ出る旅中の詩も多からぬといひしかハ彼人の云(中略)只恨らくハみそうの記をかき玉ふかなと漢文にて結選あらざるやとて眉をひそむわれば答て云卿ハ曲クもなき事の玉ふもの哉此度の事業藻思を競ふへき事かハ其上漢字にするしたらんハもらずへきこと多し事もらさしとすれハ文章の躰を損す損せしハ章を成さす何にかハせん五日十日の行一區二區の勝地を探るこそ紀行共いハめ物子の峡中十二三日の紀行すら事をもらさて記されしハ一万五千字斗と覚ゆるか人もめつらしと云日ハ二百にあまり里ハ一千に不足の紀行古人とても有へき也卿こそ漢字をハ好玉へ親戚故友漢字好ぬ人も多しましてわか家に残し置ておやおほちの蝦夷わたりの日記とて読伝へ孫子等か世々漢字通曉すへきにもあらされハ近古の文体に今俗の言語をまじへしるしたり不解事の者はさそあらん卿ハ年来護國の学もかたり合ふ人にてかゝるひかことハなとの玉ふそと高らかに答しかハあやまつたり／＼常に傳聞のもろこしふりを冷笑し玉ふ足下のやまと魂□に左袒する身にて失言せし恥かきや御免あれと立かへるや待玉へ古郷への言傳せんといふをも聞かて車はせ出ずしハし／＼と声をあけて袴のそハ取て屋の外に馳出んとすれハ波の音と／＼として束帯の形チハかきけして失ぬあたりを見れハ残燈かすかにして一床の夢破れ波の音と／＼たるそ誠也けり

景晋は旅中でも、長久保赤水、貝原益軒等の紀行文によく目を通

している。『未曾有記』をはじめとした諸紀行の、明快で、適度に誇張された文体が、彼なりの工夫と見解に基くものであり、読みものとしての効果を十分に意識した上で「近古の文体に今俗の言語をまじへしるし」た形態が選ばれたことが示される。赤水や益軒の、正確さや平明さを基本としつつ、景晋の文体は、橋南谿のそれに近い一種の大衆性を持っていて、こういった文体もまた近世の紀行文が、後期にいたって獲得してゆく一つの要素といってよい。

註

1 狂歌名は紀定丸。大田南畝の甥。その書写の経緯については『続未曾有記』末尾に吉見自身の奥書がある。鈴木氏も紹介されているので、一部のみを記す。「石みそうの記四巻は、今我隊長とたのみ参らする大司農遠山衛府の、いまだ西城扈從組の番郎たりし時の筆記なり。いにし寛政十二年春の頃と覚ゆ。大久保西山翁體經寛永諸家譜重修の任にありて、其事司られし前の宮川侯堀田豊州正敦の邸宅撰譜系記の席に携来りて侯に示さる。いまだ人間にしらしむべき書にあらずとさゝて見まほし、席にありし星野力太大田南畝の甥望月有信大田南畝の甥小田信彰大田南畝の甥己義方と四人心を合せ侯に請ひ、各一卷つゝを懐にし帰り、春の夜の短きをわすれて夜中に謄写し、次の日各元本を持出、生侯に歸し各の写本を互ひに借貸して写し取、銘々に四巻づゝの全形となせり。(後略)

2 要略すれば以下の通り。『未曾有記』は寛政十一年三月廿日江戸発、松前に赴き九月十四日に帰着する東蝦夷踏査の記。『続未曾有記』は文化二年正月十九日江戸発五月八日帰着の、ロシア使節レザノフ(レサノットと記す)との会談のための長崎往還記。『未曾有後記』は文化二年閏八月十三日発、翌三年八月十二日帰着の西蝦夷踏査の記。『続未曾有後記』は文化四年六月

十七日癸、十月廿二日に帰着の蝦夷及び太平洋沿岸踏査記。『津志満日記』

『続々未曾有記』は、文化六年及び八年の対馬行記。

3 いわゆるアイヌの「鶴の舞」の描写である。

4 「北方未公開古文書集成」第一巻解説。

5 「北方未公開古文書集成」第三巻解説。

6 各紀行中で景普は、上司あるいは部下たちとかかわりについて、楽しげかつ肯定的に記述する。「津軽海峡渡海の後」先とて使君の旅館を（中略）訪て見参すはや高橋三平等を（中略）召寄て職掌の事とも尋問るゝさま過ゆ、敷を見へし某ハふしきに物を吐すかくて候ハまたく御教のやう守り候らひし故にこそ候へいかにやおハすらんと御事の心元なきに一番に馳参て候にかくうれしくも見へ玉ふもの哉と云へバ我ハ酔さりしか従者下部皆酔てけからハしき事とも也と打笑て行厨取出て湯漬めす分ち与へられしを憚る処なくたうべて数刻閑話して罷出つ」（未曾有記巻下）、「レフンケより此山に到る大凡一日の路程なるを夜ともいわす兼行せらるゝ使君の壮健驚くに堪たり抑主君五里の勞ハ従者が拾里の勞にもあたるへし将師の身にハ剛健中ウを過て群下ハ苦しと思はるされと数の有司下吏を引率して千里の旅行毛地の難苦懦夫をして憤激せしむる事かほと勇壯なくてハ叶ふましと敬服至極せり其夜に見参せしに昨日の健行鬼の如く神のごとし吾濟等か階してとたましき御振舞候もの哉恐らくハ強勇餘り有て仁恕すこしく足らざるに似たりと申て退きし」（未曾有記巻下）、「我一言たしろかハ忽此事敗れんと輕巾着ヲ草鞋はき簀打懸仁王立に立て前後を固執し難問數篇して遂ニ小舟を廻し置川をハ舟にて涉り其餘ハ走行し手元の調度夜衾斗を背負せ行難を凌んと事□し徳内我に左袒し走り廻ハ、身を辟き相携て真先に進たり」（未曾有後記巻中）など。とりわけ『続々未曾有記』巻上では、かつて自分が仕えた上司の役割を今は自分が務めていることについて、「前編に毎夜使君の旅館に見参し霜露をも問ひ職事をも論ずとしるせしか今ハ一省の長官となつて椽吏小目我か旅舎に拜遇すること猶使君に追隨せしことし任重して道遠とやいふなり寔に以て己か任とせざらんや」と、ごく自然な感慨を抱いている。官途旅行を自らの個性を抑制するものととらえる意

識はない。公務と矛盾せぬ気持で、自分を解放した旅を続けている気配がある。

7 この種の例は多い。「船子の云。斯う闇夜と成りて。此海面の覚束なきに。行る方猶危し。さればとて舟は小さし波は高し。爰は泊べき術あらじと。ひた歎になく。巨水船の上聊か心得であるが。声を怒らし。未練の船子哉。あれ見よ。三ッ連たる星に当て行らんには。機輪必ずはぐるべからず。押せや／＼と。舷叩きてをたけびをす。」（安永四年 巨水「佐渡日記」）「此ところに取かゝりしより、さしも勇気の若も大に恐れ足戦きて立事あたはず。われと先達と前後より介抱して、いろ／＼と恥しめ励し、しばしは引行しかど、後には目見へず顔色変せしかば、いんかんとしかたくほどんど難儀に及びしに（中略）われつら／＼おもふに、かゝる事のありて妨けにもなるべからんかとて、凡庸の人を同道せざりしなり、然るに今若ものが為に予までも絶頂をきわめずして、是より下山せん生涯のいこんなるべし、何とぞして一人なりとも登りたきものをとおもひめぐらして、先達に（中略）さらばあまり残念なれば、予は独歩して絶頂に登るべし、此ところに若もを守り居てわれか下り来るをまぢくれよ、これより下は案内なくては一步もすゝめがたければ、かへす／＼も頼なりといひすて、とゞむるをもきかで、足をはかりにのぼりしに」（寛政七年、橋南谿「西遊記」巻五「天の逆針」）、「己れ髓を望みて曰く。関の昔も懐かしきに。いざ彼の見ゆる磯辺に下りて。岩根傳ひの古道を行かんは如何に。荷負へる男子が曰く。然らば後なる倉澤よりこそ下り給ふべけれ。目の下にこそ見え侍れ。此峠より下る事は最難かなる業にて。固より然る道も侍らず。縦や下り立ち給ふとも。親知らずの辺りは。この程くえ入り侍りて。傳ひ行く事いと辛く侍りなん。己れ曰く。扱こそは関守る波のかひはありけれ。いざや先つ分け試みんとて。荷など物せさせて。孝一をば先遣はし。前親民二人を率ゐて。直ちに踏下る。」（文政元年、香川景樹「中空の日記」）、「左のかたのみ、事なかりつるに、めりめりといひて、くだくるを見れば、軸のかたさけたる大船のわがふねのやかたの上に、浪とともに、おしあがりくるなり。わがふね、たちまちかたぶきて、今一ゆりに、海のそこに人なんとすれば、あはや

とて、われも人も、浪の中にとび入ぬ。さるははじめ、よろひびつのかだけぬるほどに船長いみじきおもゝちして、おづ／＼いひけるは、いとかしこき事に侍り。かくいみじき風に成ぬべしとは、夢にもおもひより侍らざりき。おほくの船ども、かくくだけでもて行ぬれば、今はあやふきをりにはべり。御心がまへせさせたまへといふ。とくよりさは、おほむをるぞとて、船はたは出たぢぬれど、いとくらき夜に、破れたる船どもの、浪のまに／＼、打あひたゞよふめれば、事なくおよぎあがるべくとおぼえず。さりとて、船とともに、いたづらに成ぬべきもあらねば、今はいのちをかぎりにおよぎ見てん、かゝるをりに、とかくの物を、身にそふれば、中々に浪をわけゆく、さまたげなりと、之倫とともに、いひあはせて、きぬぬぎすて、たふさぎの上に、帯をゆひかため、みじかきかたなひとつさして、ふな板一ひら、わきはさみもち、今や飛入てんとおもふほどに、此大がねには、おしかたぶけられたるなりけり」(文政十一年、中島広足『權島浪風記』)など。

8 「是より右に行時ハ去月越たりし高山の新道也左へ行ハ山に傍ふて海中を行くチコルキンといふ名高き難所有思ふ子細あれハ此難所を行ミんと前夜(イ後)に召具す者ともに心得させて爰に來りしに思ひはかりし引沙也時分ハよしと直ちに山巖の隅を過てミれは一丈二丈の大岩六ツ七ツ争ひ立其間を身をそはめて繞り行く風声驕て打かくる波腰を過ぎ岩に碎て玉をなし満面に灑かけて雪の飛かとおやまたる右ハ重巖聳躡天を隠し日を蔽ふ滿瀟激浪の爲に山崖崩れ驚て危岩怪石冥阿として足を履へき寸地もなく三重はかりも連りたり此石の上をわたり行く艱苦いふはかりなし潮煙りに前後を忘し石皆鳴つて辯然たりあるハ倒に垂る懸崖の頭の上に落かゝるかと隔つて過ぎあるハ石角の跟に礎する心地して去ル行こと二里斗りにして大岩二ツあり是をテレチウシトいふ一ツハ高サ三丈ほど向ひの岩ハ二丈もや有べき二の岩の頂上に長サ四五尺の丸木一本わたりたり従者皆目を見合せて舌を吐くかゝる所なれハこそあらかしめ覚悟せよといひしそ手足を突傷るとも越に越されぬ事や有へきとて佩刀ハ脱て肩にかけ手に手を取粗魚貫して這上る岩の下ハ皆劍樹の如き乱石也其危き事たとへバ虎の尾を踏

て春の水を渉ることしからふして向の岩にとり付て下んとするに此岩の下り口(イ殊)に足掛りなき故梯子を寄せかけて上り下りすとも聞しか波にさそはれて何地へ行けん尤危きわざ也若キ中間の飛んで下んとす聊示すな高名の木のほりのいましめ爰也とて徐につたい下りて此處は岩の隙間に大難ハ凌つれとも猶前の如く石頭をわたり行くこと半里はかりにして二ツの巨巖屹として相對す天門中斷楚江開と打吟して其間を馳セ抜け盤石に座して休息すとく午時ハ過て候根ハ馬につけて山道をやりて殿の御料に焼飯持て候めし候へと云我ハ彼弦卷の形なるに糯入て指添の鞆に貫きて腰にしたるか是にて足りぬ己等こそ一ツ宛も食ふて片時の飢を凌とて破子をハ従者に与へき渴すれとも潮水なれハ飲ん共せず與牛の喘ぐにことならず爰の高岬をブヨガシマといふ又石上を歩むこと半里余にして砂道になり馬手の山も木草にうつりて又半里余にしてシヤマニ川を渡り山一ツ越て未の下りにシヤマニの舎りに着ぬ」(未曾有記卷下)。

9 拙稿「近世紀行文学の要素」(福岡教育大紀要第二十四号)。